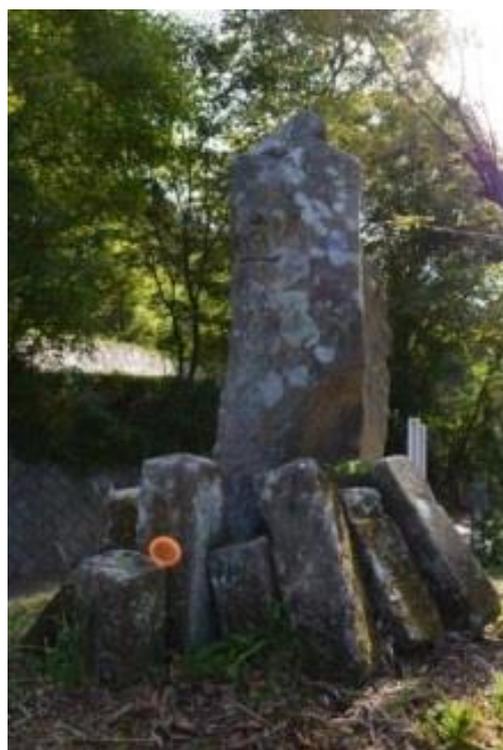


「広津の石仏・石碑・石像など」その 1

このシリーズも1年半以上のご無沙汰でした。仕事を辞めたのでこれから来春にかけて、私には比較的暇な時期でもあるので、連載します。カメラも購入したので、働いているときに、アチコチで目にして、気になった石仏・石碑・石像などをシリーズで掲載します。最初は足沼地区の「筆塚」と「二十三夜塔」をご紹介します。



筆塚は「使い古した筆の供養のために、筆を地に埋めて築いた塚」との事で、時々アチコチで見かける物です。今年になって奇特な方が広津のアチコチに説明・案内を書いた板を設置してくれました。写真にも写っている物です。そこには次のように記されていました。



「遠藤甚九郎信国 芦沼（今は足沼であるが、昔はこのように書く地名だったのか？）猿河屋（近所の人に聞いたら、屋号との事でした）の出生年文政6年 歿年 明治22年 67歳 江戸末～明治初めの手習師匠」。裏には「学制公布後も児童は学校をきらい戸長学務係は師と共に学童を学校へ迎えて遇し、師の座を続ける」と書かれていました。

二十三夜塔は 18世紀の後半から昭和の初期にかけて、日本の各地で「講」を組織した人々が集まって、月を信仰の対象として精進・勤行し、飲食を共にしながら月の出を待つ、月待ちの行事をしました。その際供養のしるしとして建てた石碑 月待塔のひとつが二十三夜塔です。二十三夜塔は勢至菩薩を本尊として 祀りました。



勢至菩薩は智慧の光をもっており、あらゆるものを照らし、すべての苦しみを離れ、衆生に限りない力を得させる菩薩といわれています。月は菩薩の化身であると信じられていた事から、二十三夜講が最も一般的で全国に広まりました。「道祖の神と石神様たち」西川久寿男著 穂高神社より。



足沼の二十三夜塔には「明治廿四年夏六月 廣津村」と彫ってあります。又左側の石灯籠には中に六つの地藏さんがあります。右にある石像2体にはそばに太い針金に穴の開いた石が幾つか通されていました。

(最後の写真2枚参照して下さい。) 何の意味・目的があるのか地元の長老などに聞いてみようと思います。

